『週刊ポスト』2020.2.28（金）発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第110回 ホステスのリクエストが支えたムードコーラス

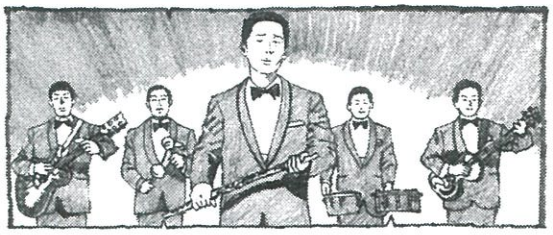
黒沢明とロス・プリモスの名前を知ったのは昭和42年の秋だったでしょうか、高校1年だった私は、この年の10月から始まったラジオの若者向け深夜放送『オールナイトニッポン』に夢中で、当時続々と登場してきたグループサウンズのデビュー曲や新曲を音量を弱めつつ耳をそばだてて聴いていました。

そんな折、お気に入りの絶叫派GSとは対極にあるような大人のムードコーラス、『ラブユー東京』がラジオから突如として流れてきたのです。この曲はすでに1年半以上前の昭和41年4月に彼らのデビュー曲（B面）として発売されていたもので、歌とは縁遠いような「有線放送」という媒体によってじわじわと人気を獲得していった経過が紹介されました。

有線放送が関西から東上してきたのは昭和39年の東京五輪閉会後あたりで、ラジオの歌謡リクエスト番組でも有線放送の順位が発表され、テレビには登場しない歌手やグループ、聞いたことのない歌の知名度アップに大きく貢献することになります。そして、その有線放送と蜜月関係にあったのが夜の盛り場で働くホステスさんたちでした。

マンモスとかグランドを冠にした大型キャバレーが「夜の大人の社交場」として東京五輪前に急増、五輪開催年の3月には、銀座8丁目、現在の博品館劇場のある場所に、1000坪の規模を誇る広いフロアーとホステス数1000名を売り物にした「銀座ハリウッド」がオープン。同タイプの「新世界」「月世界」「クラブハイツ」「エムパイア」「ユニバース」「王将」「カサブランカ」などの大型キャバレーを舞台に歌謡文化が都会の盛り場に根付いてゆきます。そこではのちにラウンジ歌謡と称された大人の歌を聴かせる歌手やコーラスグループ、歌とトークで笑わせるボーイズ系のお笑いグループや色物の芸人が登場し、客とホステスさんを楽しませてくれました。

なかでも女心をくすぐる男性ムードコーラスはホステスさんに人気が高く、『ラブユー東京』が大ヒットへと導かれた大きな要因の一つに山梨・甲府のホステスさんたちの応援があったそうですが、ロス・プリモスのボーカル、森聖二の美声に魅せられた全国のホステスさんが、開店前にお店の公衆電話に向かったのでしょう。ロス・プリモスのマネジャーも大量に両替した10円玉片手に毎日何十回もリクエストするという涙ぐましい努力がありました。



キャバレーやナイトクラブで働く女性たちにとって、知名度の低い歌手やコーラスグループは、むしろ「同じ職場の仲間」といった親近感を抱きやすかったのかもしれません。来店前後の歌い手だったりすれば想いも一入でしょうし、自分たちがヒットに一役買える喜びは、翌日もまた公衆電話に向かうという好循環を生み出していきました。

有線放送とホステスさんの後押しは『ラブユー東京』以後も、多くのムード歌謡を大ヒットに導くことになります。当時と比べ物価の違いはありますが、公衆電話がなくなりスマホが普及した現在において、忘れがちになってしまった「10円玉の持つ重み」はけっして軽いものではなかったのです。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中